

2022年9月11日 礼拝説教要旨

詩編講解説教121「人生の旅路」

詩編121：1～8、ルカ24：28～35

「目を上げて、わたしは山々を仰ぐ。わたしの助けはどこから来るのか。わたしの助けは来る。天地を造られた主のもとから」(1～2節) この印象深い言葉で始まる詩編第121編は、讚美歌301番「やまべに向かいて我目をあぐ」でよく知られているかもしれませんが。でも改めてこの「目を上げて山々を仰ぐ」とはどういう意味なのでしょう。「山」というのは、しばしば聖書では神さまが臨在される場所とされており。有名なところでは、モーセが神さまの召命を受けた場所、あるいは十戒を与えられたのはシナイ山でありました。また福音書では主イエスのお姿が山の上で光り輝くという山上の変貌と呼ばれる出来事がありました。ですから山は、そのような神さまを近くに感じる場所というイメージがありますので、ここもそういう感覚で読みたいところかもしれません。

しかしどうもこれは巡礼の旅路の困難を表していると解釈する場合があります。巡礼の旅人は遠く山々を仰ぎながら、これからこの山々を越えて都にいかねばならないと考える。また巡礼を終えた者たちは、今度は再びこの山々を越えて帰っていかねばならないのです。巡礼の旅は、それなりの覚悟が必要です。もちろん全行程を徒歩で行くわけですから、足腰の強さ、健康であることが求められます。また日帰りというわけにはいきません。何日もかけて行く。お金も必要です。良きサマリヤ人の話のように途中で追いはぎに襲われる危険もあります。巡礼者たちが遠く山々を眺めながら思うことは、とにかくこの旅が守られるように、無事に目的地に着くことができるように、そして帰って来ることができるようにということではないのでしょうか。だからこそ「わたしの助けは来る。天地を造られた主のもとから」神さまの助けを求める。そういう切なる願いがこの詩編には込められているのです。

「どうか、主があなたを助けて、足がよろめかないようにし、まどろむことなく見守ってくださるように」(3節) ここからは具体的な旅の困難さが表現されています。山道で足がよろめくのは危険です。転倒し、滑落するということがある。今日は高齢者の祝福がありますが、年をおめしになられますと皆さん足が弱られます。とにかく転ばないように、気をつけて生活されるでしょう。また「昼、太陽はあなたを撃つことがなく」(6節) 今年の夏も猛暑でした。今では熱中症対策は当たり前になりました。太陽は日照りや渴きをもたらします。また「夜、月もあなたを撃つことがない」とあります。古代の人々にとって月の光もまた恐怖でした。西洋では「ルナティック」という言葉がありますが、魔物によって心が不安定になると考えられておりました。そういう太陽の光から、月の光からも神さまが守られるように。神さまが覆う陰になってくださいと願っています。またここでは「まどろむ」という言葉が繰り返されます(3、4節)。「眠る」(4節)という言葉もあります。夜の闇はやはり旅人にとっては危険でした。夜行性の動物が襲って来るかもしれません。寝込みを襲われることもある。けれども「見よ、イスラエルを見守る方は、まどろむことなく、眠ることもない」(4節)とあります。神さまが寝ずの番をされるのです。これはイスラエルにとっては実体験がありました。「その夜、主は、彼らをエジプトの国から導き出すために寝ずの番をされた」(出エジプト12：42)イスラエルがエジプトを脱出したとき、神さまが寝ずの番をされてイスラエルを守られたのです。どれほど心強かったことでしょう。

そして最後「あなたの出で立つのも帰るのも、主が見守ってくださるように。今も、そしてとこしえに」(8節)「あなたの出で立つのも帰るのも」とは、出発から帰還まで。終始、神さまがその歩みを守ってくださるよという祈りです。一週間のサイクルもまた日曜日から日曜日へ、この礼拝から出発し、この礼拝へ帰って来るこの世の旅路です。目をあげると、いくつもクリアしなければならない課題が山積している。その課題の山々を眺めながらため息をつくということもあるでしょう。また「出で立つのも帰るのも」というのは、わたしたちの人生の初めから終わりということを考えることもできます。人生の旅路のすべて。その人生のすべてを神さまが最後、目的地まで守り導いてくださる。2節に「天地を造られた主」とあります。創造主である神さまがわたしたちの人生を始めてくださいました。だから最後までこの人生を導いてくださる。そこに神さまの御心があります。

その人生を、出で立つのも帰るのも、神さまが見守ってくださる。最後、その目的、完成へと導かれる。これをキリスト教の信仰では「摂理」と呼びますが、この摂理を信じることで、わたしたちは人生を諦めるのではなく、希望を捨てずに前に進むことができます。それこそが信仰の力と申し上げてよいでしょう。摂理というと、やはり『ハイデルベルク信仰問答』を思い出します。問26～28にかけてこういう言葉が続きます。「この方が体と魂に必要なものすべてをわたしに備えてくださること、また、たとえ涙の谷間へいかなる災いを下されたとしても、それらをわたしのために益としてくださることを信じて疑わないのです。なぜなら、この方は、全能の神としてそのことがおできになるばかりか、真実な父としてそれを望んでもおられるからです。・・・雨もひでりも、豊作の年も不作の年も、食べ物も飲み物も、健康も病も、富も貧困も、すべてが偶然によることなく、父親らしい御手によって、わたしたちにもたらされるのです。・・・わたしたちが逆境においては忍耐強く、順境においては感謝し、将来についてはわたしたちの真実な父なる神を固く信じ、どんな被造物もこの方の愛からわたしたちを引き離すことはできないと確信できるようになるということです」わたしたちはこのような信仰によって守られ支えられています。

目をあげれば課題が山積して、時々、わたしたちは自分を見失いそうになります。つい昨日もわたしは妻に弱音を吐きました。何度もそういうことがあります。牧師だから強いとか、悩みがないということはありません。でも御言葉を語る中で、この神さまの摂理、この人生の旅路が導かれ、守られていることを思い出すのです。礼拝でそのことを思い出し、また勇気を出して歩み出す。その繰り返しです。もしこの信仰がなかったら、わたしたちはそれこそ二の足を踏み、一歩も前に進めないでしょう。今日は、ルカ福音書のよみがえりの主が共に歩まれたエマオの途上のところを読みました。キリストがわたしたちをうんざりさせる罪と死、わたしたちを打ちのめすこの世の現実に勝利してくださいました。そのお方がわたしたちと共に人生の旅路を歩まれます。勇気を出して、もう一度この礼拝から一歩を踏み出して行きましょう。